国語

（問題）

2013年度

〈2013 H25072020〉

注意事項

1 問題冊子は、試験開始の指示があるまで開かないこと。

2 問題は2～10ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。

3 解答はすべてマーク解答用紙の所定欄に、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルでマークすること。

4 氏名は、試験開始後、マーク解答用紙の所定欄に正しくていねいに記入すること。

5 マークははっきり記入すること。また、訂正する場合は、消しゴムでていねいに、消し残しがないようによく消すこと（砂消しゴムは使用しないこと）。

マークする時	●良い	◎悪い	○悪い	
マークを消す時	○良い	◎悪い	○悪い	

6 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。

7 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

(一) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

小説作品・詩作品・短歌作品・俳句作品あるいは戯曲作品その他もろもろ、およびそれらの評論を主体とする「文学」は、私たちの前にたえまなく書物として顕現する。そして書物それ自体は、ある価値的な基準を持った「物」であり、「物」としての価値にはかならずしも還元し得ない［　A　］・抽象的なものに準拠する「文学」の価値とは別の所在に置かれる。ではなにが、書物の価値的基準を主に具現しているか。それが書物の造形である。書物の造形の主体を、その内側からではなく外側から、端的に言い換えれば、文学の抽象的価値からではなく、具体的価値から見ようとする役割を本稿は与えられている。

書物の具体性の主体とは、つまり装釘である。装釘された書物は「文学」の価値をどのように反映するのか。反映という語意が従属的な印象を持ってしまうなら、書物は「文学」の価値をどのように具現しているのかと言い換えてもよい。[1]「文学」の価値に対して物質的な変奏を与えること、それが物としての書物の存在だとすれば、その変奏を「文学」と呼ぶことは可能か。本稿の基本の主題を問えば、そうなる。いわば、「文学」とは別個の価値を備えた「物」としての書物を「文学」と見做すことは可能かということだが、この問いは、あらかじめ多くの齟齬を含んでいるだろう。

なによりまず「文学」(の価値)への視線自体がすでに複層的である。文字を読むことから始まる文学的な視線の運動は、ただちに文字の「意味」を獲得する意識に従属するからだ。身体としての視線それ自体を忘れるようにして「文学」は読まれているということである。[2]身体／視線とその忘却の連続した入れ換わりが、私たちが言う「読書」のことである。忘却を償うように視線は次の語句を、センテンスを読み、身体に補充する。身体は瞬間に意味に獲得され、無化される、その繰り返し。いわゆる読書家とそうではない者の区分もそこにあるだろう。無化された視線／身体を瞬間ごとに追憶してしまう者は、本来に読書家ではない。

そもそも読書家が読んでいるのは「書物」ではなく、文字であることも確認する必要がある。読書とは書かれた文字(書字＝グラフィスム)を読むことなのである。読書家ではない者が書字を読む場合、そこには必ず機能的な選択があり、その限りにおいて読書の精神的・抽象的な価値は彼に維持されている。このことは、機能的な選択の以前に書字を読むことに慣れている読書家にとっても同様である。機能的であれ慣習的であれ、書物を読むことは、読―書字のことであり、「意味」となった書字は透明な存在となるからだ。書物は、ひとまずその機能的選択と慣習的選択の埒外にあって、ただ物として存在している。機能と習慣を充たされた物は、それがなにかしらの道具でない限りそこに在ることしかできない。書物は、本質的にただ在ることしかできない物であるということができる。

たとえば、他人の家を訪れたとき、なぜ人は例外なくその書棚をしげしげと眺めてしまうのかと考えてみると、よく分かる。訪問者は、家人の精神的・抽象的な、そしてこの場合いくらかの［　B　］な類推をそこに見出すのではなく、他人の機能的・慣習的な価値のあとかたが物となっているのをしげしげと見るのである。その物は装われている。

このことを踏まえてさらに、書物の装釘は、瞬間ごとに無化される「文学」への視線／身体の償いを明らかにする機能的な場のことなのか、と詰問することもできるだろう。「視点であり無視力であるもの」(ジャック・デリダ)が「文学」の価値を想像しているとすれば、書物の装釘は、その想像を切断するように(そこに分け入るような)視点・視力を行使するものとなる。いっぽうの、文字の意味に無化され続ける、いわゆる読書の視線に対して、決して無化されることのない、つまりは身体から剥奪されることのない視点と視力の行使を「文学」に刻むもの、それが装釘であり、書―物の造形である。

本稿は一般的な、概念的な「書物」についての思考を望んではいず、それどころかごく近年の「文学」と「装釘」の関係を具体的に見る役割にあるが、書物の多様な造形自体が、私たちの意識にある「文学」およびそのイメージと不可分になっているのがまさに近年の現象だとすれば、以上のような、いささか難ジュウな前提をまず置かざるを得ない。しかしむろん、前提としてはすこしも充たされてはいない。かと言って、四万年以上をさかのぼる「文字」の歴史をひもといてみたり、文字を印字する紙の発生史を辿って書物の起源を訪ねたりするのは馬鹿げているばかりではなく、ここではあまり意味がないと言える。文字の発生や書物の誕生は、必ずしもアルケオロジー(注)にのみ終着しない未決定な問題領域を含んでいるが、本稿の任を超えてもいる。

ここでは辛うじて、この数年、最もスリリングな「文学的書物」を書いている丹生谷貴志の『女と男と帝国』から示唆を受けるに留めよう。ちなみに丹生谷貴志は、『女と男と帝国』とともにもう一冊の傑作な文学的書物『天皇と倒

錯』を出しており、この二冊は、批評における新たな文体の発生を刺激的に匂わせる必読の書である。また、あくまでも私見を付言すれば、緩慢さと的確さ、発見と失念、個の肉声と超越的な声などなどが交差する、書くことの生々しい臨場感を恐るべき美しさで保つ丹生谷貴志の文体は必ずしも、今日まで彼の書物の装釘に充全に把握されているとは思われない。

で、その『女と男と帝国』には、「『良心の呼び声』の余白に――ハイデガーと文字デザイナー」という一論考があり、そこで丹生谷貴志は、ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリ、そしてジャック・デリダらの仕事を前提・要約しながら、次のように、文字／書字の原基を述べる。

その社会（「無文字社会」＝引用者注）では「グラフィスム」は例えば新参者のイニシエーション儀式においてその身体に直接、入れ墨や切り込みといったかたちで刻まれるものとしてあった。それ自体は意味的な文字や表象では必ずしもなくて、重要なのは、それが身体に直接刻まれるときの「犠牲者」の苦痛の反応そのもの、つまりは記号と身体との間の直接的な軋み――苦痛においてそれが何ものかとなるという点である。

ここに、「文学」の発生と「書物」のはるかな仕組みを見ることができる。刻むことは、それ自体が「書字」の運動であり、刻まれる物となった洞窟の壁面、石、木、蠟などが「書物」の原型となる。書物の語源であるラテン語のLIBER、ギリシャ語のBIBLOSはともに樹皮を指している。それらは刻まれる対象だった「身体」の変容である。たとえば紀元前三世紀ころのローマで蠟に「書字」を刻んだ物のひとつにスタイラスSTYLUSと呼ばれた鉄筆があり、それがスタイルの語源となったことも文学的な示唆であろう。しかし「重要なのは」、書――字と身体との直接的な関係のなかに発生した「グラフィスム」の意味（「何ものか」）が、やがて「「書き記す文字――エクリチュール」へと変移してゆくことである」。「書き記す文字」が記すのは単に言葉の意味ではなく、それを超越した「何ものか」の声であり、それが意味をトウ過[b]して書字――印字を霧のように被っている。読書とは、そうした声が湧き上がる霧中の出来事となる。しかし書物だけは、「物」として透明な霧に立ちはだかっているのだ。丹生谷貴志の表現を引けば、「ざわめく書物」が、そこに現存し始めるのである。

[3] 身体の直接的な苦痛において人々の視線の前にあった「グラフィスム」を、その「ざわめき」のなかに感覚し奪回しようとする行為。それが装釘の密かな欲望としてうっすらと見えてくる。

（稲川方人「ざわめく書物」による）

（注）アルケオロジー…考古学

問一　空欄 A ［　　］ B ［　　］ に入る最も適切な語句を、それぞれイ～ニの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

A　イ　精神的　ロ　客観的　ハ　論理的　ニ　逆説的

B　イ　末期的　ロ　楽観的　ハ　教養的　ニ　本格的

問二　傍線部1「「文学」の価値に対して物質的な変奏を与えること」の説明として最も適切なものを、次のイ～ニの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ　装釘された書物は、すでに書籍として得ている文化的な価値に加えて、それを書物として新たに販売されることで商品としての価値も持っているということ。

ロ　装釘された書物は、内容として持っている価値に加えて、視覚や触覚から刺激を与えるという新たな価値も持っているということ。

ハ　装釘された書物は、消費者に購入されたことで物としての価値を認められたことに加えて、見た目による新たな芸術的価値も持っていること。

ニ　装釘された書物は、誰に読まれるのか分らない抽象的な価値に加えて、特定の読者を得ることでその人に働きかけるという具体的な価値を持っているということ。

問三　傍線部2「身体／視線とその忘却の連続した入れ替わりが、私たちが言う「読書」のことである」の説明として最も適切なものを、次のイ～ニの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ　読書とは、身体、ことに視線に大きな負担を強いるものであるから、その辛さを失念するほど書物に没入するためには、周囲の環境に左右されず、集中することが求められているということ。

ロ　読書とは、私たちの身体の中で常に書物の活字に反応している視覚により自動的に進められていく意味の解読に対して、意識によって読者自身の考えを忘却し、作者が構想する作品世界へと到達する試みであるということ。

ハ　読書とは、目前の文章を一行ずつたどってその意味を理解するという、時間を要し根気のいる作業であるが、読者は読み進むうちに作品に引き込まれてその苦労を忘れ、感動や発見を得て満足する行為であるということ。

ニ　読書とは、眼で読んだ内容を脳に送って意味を理解するという身体の機能を用いて行うものであるが、頭の中でその世界を想像する際には、そうした身体機能の動員自体を忘れる、ということの繰り返しであるということ。

問四　傍線部a・bに当たる漢字を含むものを、それぞれ次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

a　イ　ジュウ居　ロ　ジュウ当　ハ　ジュウ撃　ニ　ジュウ滞　ホ　ジュウ来

b　イ　トウ視　ロ　路トウ　ハ　死トウ　ニ　トウ手　ホ　トウ器

問五　傍線部3「身体の直接的な苦痛において人々の視線の前にあった「グラフィスム」」の説明として最も適切なものを、次のイ～ニの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ　無文字社会においては文字による意味の共有がなされなかったため、伝達のために図像を描くことがすなわち、苦痛を伴う入れ墨や切り込みという行為であったということ。

ロ　無文字社会から文字社会への移行において、人々は自身の体に図像を刻むことを止め他の物質にその対象を移したのであり、そこには身体的苦痛からの解放があったということ。

ハ　無文字社会において眼に見える形に描き表わされたものとは、人々の身体に痛みを伴って刻み付けられたものであり、それを眼にする者はその苦痛を想像したということ。

ニ　無文字社会において犠牲を強いられたのは、描く対象としての身体であり、文字社会の到来によって書物を生み出した人間は、身体には無関心になって行ったということ。

問六　本文が述べている内容と合致するものを次のイ～ホの中から二つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ　読書行為における視線の働きは、あらゆる身体的機能に優先されており、それは無文字社会でも文字社会の価値観と直結している。

ロ　優れた装釘とは、作品の内容と響き合い、読者の感受性に「ざわめき」を喚起するものである。

ハ　理想的な書物には、内容の充実以上にそれを過不足無く反映する装釘という二面性がある。

ニ　人々が文学に求めるものは、読書による感動であり、必ずしも装釘にこだわる必要はない。

ホ　筆者は丹生谷貴志の著作に関して、その高い文学性が必ずしも装釘に反映されているとは考えていない。

（二）次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

「運動会」はアスレチック・スポーツとして日本の学校に紹介された。明治十一年五月、札幌農学校で催された「遊戯会」である。札幌市の道路にラインを引いたコースで行なわれた「三段跳」、「半英里競争」、「袋競争」などの競技は、同校のアメリカマサチューセッツ州アーモスト大学出身のお雇い外国人教師たちが母校のアスレチック・スポーツの種目をそのまま踏襲したものであった。西洋からの一連の身体文化移入の端緒である。というのも、アーモスト大学での「体操術」導入の目的が、生徒の夭折（ようせつ）の防止、頭脳能力の向上という身体改造にあり、さらに「酒を飲み或いは衣服容貌を飾るの風大いに流行」している「悪弊」を防止する風俗改良のためだったからである。そこでは、年一回の参加者を招いた「生徒臨時体操術の閲覧」が行なわれ、百ドルの賞金を懸けて日頃の身体鍛錬の成果を競ったという。[1]このようなイベントを、札幌農学校生徒が「遊戯会」と訳したのである。

果たして「遊戯会」は書生たちにとって、原義どおり〝身体鍛錬〟の場だったのだろうか。志賀重昂（しがしげたか）の日記に、明治十五年の「遊戯会」の種目を生徒たちが相談して決めている様子が記されている。

遊戯会云々の報告来る。予新奇の題五個を選みて曰く、（一）餅まきは如何、（二）打毬（注）は如何、（三）予科の小僧をして子供相撲をとらせる如何、（四）豚（豚か価高ければ犬にてもよろし）を逐ふ如何、（五）遊戯後孔子哲学士連をして踏舞せしむべし。

これらの提案のうちどれだけ実現したのかは定かではないが、書生たちは〝競い〟ではなく〝運〟や〝偶然〟を、［　A　］ではなく近世から伝わる神事との関わり、あるいは「芸」としての身体表現を期待している。アスレチック・スポーツといっても彼らにとって一風変わった〝遊び・戯れ〟に過ぎなかったのではないか。言いかえれば、初の「遊戯会」から四年も経った頃には、彼らの身体は知らず知らずのうちに鍛錬的な身体観に逆らうようになっていたのだ。「アスレチック・スポーツ」＝「遊戯会」とした翻訳の微妙な食い違いには、外国人教師が意図した[2]近代西洋的身体と伝統的身体の乖離が表われているように思われる。

では身体鍛錬はカリキュラム上で行なわれていなかったのか、といえばそうではない。明治十二年以降、週二時間の「練兵」の実施。銃を携帯して背嚢（はいのう）を負って隊伍を組み、市街や近隣の農村を武装行進して巡る。それでも期待された成果はあがらず、逆に生徒の「[3]軽躁浮薄」が懸念問題として浮上する。明治十三年度は病気による欠席が開校当時よりも上回った。その原因は書生たちが文弱に流れ、身体を鍛えて強壮に作り変えていこうとする意思が少ないからだとされ、運動能力において芳しくない生徒の欠席率が高いことが統計的に示された。ダンベル、バーベル、マットレスといった体操器具や生徒用「靴」が購入され「体操術」がカリキュラムに加えられた。

ところが、明治十七年になっても書生身体の改良は全く進まなかった。運動緩慢、身体軟弱、疲労甚だしく休憩を乞う者、脱水状態を引き起こす者も出る始末。主知主義が批判され、演舞に気持ちが込められていないからだとする精神論も持ち出される。「嗚呼命を奉じ教練を始めて以来ほとんど四十余日に至るも身体前日に異ならず、且つ実科の進歩も為に薄らしむ」と兵学教師・高田信清は嘆いている。

『当世書生気質』でも、書生たちの身体は柔弱である。「方今の書生輩ハ、皆顔色が生白うて。あたかも日陰の唐茄子（とうがん）。イヤ冬瓜（かぼちゃ）のやう」な身体であるのは、むやみに学問をして不健康にしているためで、しかも婦女子と交際してますます「文弱の風」を増している…というのが[4]人々の彼らへのまなざしであった。このような言説の背景には、近代的な身体観の導入によって身体を見る者のまなざしの変化があろう。身体状況は「活力統計表」などの科学的合理的方法で記録され把握されるとするのがその理念であるが、判断の基準はあくまで人間の目という尺度のうつろいやすい代物であるからである。書生たちの身体の近代は遅々として進まなかったが、彼らを見る為政者や教育関係者、言論界のまなざしの近代化は身体に先行してしまっていたようだ。

では、本当に書生の身体は柔弱だったのだろうか。残念ながらこのことを検証する客観的資料はない。が、書生身体が「体操」や「教練」の示す近代的身体観に適合的であったのかあるいはそうでなかったのか、についてはある程度推測できそうだ。

三宅雪嶺の回顧によると、士族出身者でさえ、気質こそ「事があれば剌し違える意気」をもっていたが、撃剣などの

身体鍛錬の経験は意外に乏しかったという。明治十五年当時、札幌農学校では士族出身者の割合が八三％（四四／五三名）であることを考えると、同校の書生身体に対する失望と嘆息はおおむね［　B　］に向けられていたことがわかる。

しかし身体の強弱それ自体よりももっと問題だったのは、集団としてのまとまった演技・訓練という発想がそもそも士族のみならず日本人には無かったことである。書生たちの行う運動といえば、運動場にある体操機械で個々に「遊び戯れ」たり「三々五々遠足」するのがせいぜいで「団体的に運動するやうなことがない」という三宅の証言どおりである。なぜこの発想の差が重要な意味をもってくるのだろうか。

そもそも近代西洋的身体は、「完全の人」の陶冶（とうや）を狙ったもので、武道や球技などは肉体の偏った部分しか使用しないという理由で正統とは認められず、行進や走駆、高跳などの陸上競技種目こそ相応しいものとされた。「活力統計表」が作成される理由は、食事の量、身長、体重、肺活量などの各部位を数値化し、一覧表で示し、個人間で、あるいは個人内で比較にさらし凹凸を際立たせるためである。そして、その後に身体総体を調和的に組み立てようとする。

（井上好人「書生風俗と身体」による）

（注）打毬…日本の伝統的な球技。

問七　傍線部1「このようなイベント」の説明として最も適切なものを、次の**イ**～**ニ**の中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ　アメリカで行なわれていた運動会をもととして、それに対抗するために日本で作られたイベント。
ロ　学生たちが意匠を凝らした服装を着て集まり、お酒を飲んで互いに交流を深めるためのイベント。
ハ　学生の心身の状態を比べ、評価し、それによって心身を改善していこうとするイベント。
ニ　競技によって互いの技を競い、その中で参加者がお互いの理解や親睦を深めるためのイベント。

問八　空欄［　A　］に入る言葉を、次の**イ**～**ホ**の中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ　動きの調和
ロ　身体の優美さ
ハ　西洋の芸事
ニ　身体の快楽
ホ　鍛錬の成果

問九　傍線部2「近代西洋的身体と伝統的身体との乖離」の説明として最も適切なものを、次の**イ**～**ニ**の中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ　全体としてのバランスや均整をめざす身体と、特定の技芸に秀でることをめざす身体の間のずれ。
ロ　鍛えて改善していくべきものとしての身体と、遊び、楽しむ手段としての身体の間のずれ。
ハ　西洋における生活スタイルに適した身体と、日本の伝統的な技芸に適した身体との間のずれ。
ニ　近代的な運動競技で鍛えられる健康で体力ある身体と、運動不足で病気がちな身体との間のずれ。

問十　傍線部3「文弱」の語句の説明として最も適切なものを、次の**イ**～**ホ**の中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ　文字を読む能力がないこと。
ロ　文学の影響を受けて柔和になること。
ハ　言葉の力に弱いこと。
ニ　学問の世界にうといこと。
ホ　学芸ばかりしていて弱々しいこと。

問十一　傍線部4「人々の彼らへのまなざし」とあるが、これについて著者はどのようにとらえているか。その説明として最も適切なものを、次のイ～ニの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ　この時期の書生の身体は、それら身体を柔弱と見なし、より強く鍛えていくべきとするまわりのまなざしによって、影響を受けていったことがわかる。

ロ　実際に書生の身体がどうであったかは別として、少なくともそれら身体を見る側には、近代的な身体観が価値基準となっていることがわかる。

ハ　当時の書生たちを見ていた人々は、柔弱な書生の身体に対して批判的であったが、当時の書生たちの思いもまたそれと同様であった。

ニ　実際にこの時期の書生の身体がどうであったかは、当時の書生たちを見る側の身体観と同様、はっきりした資料がないために正確には知り得ない。

問十二　空欄 B に入る言葉を、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ　士族の若者
ロ　士族の気質
ハ　書生と士族
ニ　書生の気質
ホ　書生の若者

問十三　傍線部5「なぜこの発想の差が重要な意味をもってくるのだろうか」とあるが、著者はなぜこうした問いを提示しているのか。その説明として最も適切なものを、次のイ～ニの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ　全体としての完全性を求める西洋の身体観と、伝統的な日本の身体観との間の発想の違いは、統計的な数値では明確に示すことができないから。

ロ　全体的な調和ではなく、個々の動きに関心を向ける日本の伝統的な身体観が、その後の日本人の身体観に大きな影響を与えたから。

ハ　近代西洋における身体観と、日本の伝統的な身体観との間の発想の違いが、西洋諸国と日本とが互いに理解することを難しくしてしまうから。

ニ　個々のばらばらな状態にある身体を、調和した一つの理想の形にするという発想が、近代西洋の身体観の根底にあるから。

問十四　本文が述べている内容と合致するものを、次のイ～ニの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ　明治期における日本人の運動能力は、教育に体育が組み込まれていくことが遅かったために、西欧と比較して低い状態にあった。

ロ　近代の日本において、身体を強化するという発想は軍事教練に見られ、学校教育にも早くから取り入れられていた。

ハ　明治期の書生達が身体を強くしていく過程においては、西欧から取り入れた運動会が重要な役割を果たしていた。

ニ　明治期における士族の子弟は、軍事的な集団活動については身についていたが、集団で運動するという発想はなじまなかった。

(三) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

むかし漢高祖と申す帝おはしけり。呂后ときこえ給ふ后、恵太子(注1)の母にて誰よりも御心ざし重くみえさせ給へり。ほか腹の親王に趙の隠王と申す人を御心ざしのあまりにや、帝、東宮に立てんとおぼしける御気色を呂后見給ひて、あさましう心うき事におぼして、陳平・張良ときこゆる二人の臣下をめしよせて、「かかるいみじきことなんある。いかにしてかこのうらみをやすむべき」とのたまひあはするを、「げに」と思ひけん、「かなはざらんまでも、はからひ侍るべし」とこたへて帰りぬ。又こののち二人の人も世の中の乱れなんずる事をなげきて、おのおのはかり事をめぐらしけり。「商山といふ山に世をのがれつつ、帝の召すにも参らで、こもりゐたる賢人四人あり。それをこしらへいだしてこの恵太子につけたてまつりたらば、さりとも恥づる心おはしなん物を」と思ひよりて、この山の中にたづね行きにけり。

四人の人うち見つつおどろきていはく、「なにごとにいとかくあやしげなるすみかにはわたり給へるにか」ときこえさするに、「世の中乱れんとつかまつれば、我らが身にまでもなげき深くて、この山に隠れゐむと思ふ心侍り。しかれども、世の中の滅びおさまらざらむ事は、ただその御こころなり」といへるに、この人うち笑ひて、「君も我に A おき、恥ぢ給はん事いとありがたかるべけれど、むなしう帰したてまつらんもむげになさけなき様なれば、後のことをかへりみず、けふばかりは御おくりに参るべし」と言へりければ、かぎりなく嬉しくおぼえて、四人の人を具しつつ東宮の御もとへ参りぬ。たちまちに学士といふつかさになりて、ふるまひ給ふべきありさまなどこまやかに教へたてまつるに、たのもしくおぼさるる事かぎりなし。

かくて年たちかへるあした、東宮内に参り給へる御ともに、この人ども四人いとやうやうしくふるまひけだかきさまにて御ともに侍りけるを、帝よりはじめつかうまつる人どもも、おのおのあやしげに思へり。帝「これは誰にか」とたづねとはせ給へる。御ともに侍りける人申していはく、「日ごろ召しつる商山の四皓(注2)に侍る」ときこえさせ給ひけるに、御心も臆せられて、あさましくぞおぼされける。これによりて、帝、四皓にのたまはく、「我むかしより、なんぢに国のまつり事をまかせんと思へり。しかれどもあへて聞かざりき。しかるを、若くいとけなき東宮にしたがへる心知りがたし」。四皓申していはく、「君は御心かしこくて世の中をたいらげ、国を治め給へども、人をあなづり、かしこきをもかろめ給ふあやまちおはします。東宮は若くおはすれども、御心をきてなさけ深く、礼儀をただしくし給ふときこえ侍るによりて、参りつかうまつれり」ときこえさせければ、「東宮は我よりも心かしこきにや」とおぼして、この事を思ひとまらせ給ひにけり。かかれば、呂后、陳平、張良よりはじめて、世にある人々さながら心やすくなりにけり。

商山の四皓は、帝の御ありさまを、心やすく見なしたてまつりてのち、いとまを申してもとのすみかに帰りぬるを、世の人たとへをとりてほめていはく、「世の中、日でりにあひて、草木も枯れ、土さへさけて、人の命も絶えぬべきに、ひとたび雨降りつつ、よもの木ずゑをうるほし、門田の稲葉も露しげくむすびゐぬるのち、八重の雨雲山に帰りゐるなるべし」となむいひけるこそ、まことに「さも」とおぼゆれ。

又、周文王と申しける帝の御時、(注3)公望ときこゆる賢人、帝に召しいだされてのち、つかさくらゐ身にあまれるによろこびて、帰る思ひなかりけり。尭と申す帝、許由にくらゐを譲らんとて三度まで召しけるを、「きたなき事を聞きつ」と言ひて、潁水といふ川に耳を洗ひけるも、「いかなる事にか」と、をかしきやうにきこゆ。

又、巣父といふ人、牛を追ひてこの川をわたらんとするに、「きたなき事聞きて、耳洗ひたる流れにしも、けがるべきかは」とて、はるかによけて通りけんも、 B こそおぼゆれ。又、水汲むひさごを一つ、竹の編み戸にうちかけたりけんが、風の吹くたびに戸にあたりつつ鳴りけるをさへ「うるさし」と言ひて、たちまちに割り捨ててけり。これを聞くにも「げに」ともおぼえぬに、この商山の四皓はなさけあり、人をたすくる心も深くて誰よりもこのもしき様におぼゆれ。

(『唐物語』による)

(注1) 恵太子…高祖の長子。漢の二代目皇帝。
(注2) 商山の四皓…中国秦の時代の末に騒乱を避け、商山に隠棲した四人の老人のこと。ひげや眉毛が真っ白(皓白)だったことからこのように呼ばれた。
(注3) 公望…太公望のこと。

問十五　二重傍線部イ～ホの「きこえ」の中から文法的に違うものを一つ選び、その解答欄にマークせよ。

問十六　傍線部1の解釈として最も適切なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ　恵太子もご自分の振る舞いを直されるだろう。
ロ　四人の賢人も恐れ多いことだと思われるだろう。
ハ　帝もご自分の考えを恥ずかしくお思いになるだろう。
ニ　趙の隠王も恥ずかしいことをしたと反省されるだろう。
ホ　呂后も私たちにひどいことを命じたと反省されるだろう。

問十七　傍線部2は、誰の「心」か。最も適切なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ　呂后
ロ　恵太子
ハ　陳平・張良
ニ　世の中の人々
ホ　商山の四皓

問十八　空欄 A に入る語として最も適切なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ　所　ロ　身　ハ　礼　ニ　名　ホ　利

問十九　傍線部3は何をさしているか。最も適切なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ　四皓を罰すること。
ロ　皇太子に位を譲らないこと。
ハ　四皓を召し使うこと。
ニ　人を侮り軽んじること。
ホ　新しい皇太子を立てること。

問二十　空欄 B に入る語として最も適切なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ　いさぎよく　ロ　をこがましく　ハ　はづかしく　ニ　けだかく　ホ　いとほしく

問二十一　傍線部4について、他の賢人たち（太公望、許由、巣父）と比較した際の商山の四皓の美点について、書き手はどのように考えているか。本文と合致するものを次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ　人に頼られれば仕事をする一方、後は官位に拘泥せず、潔く職を辞して山に戻った点がすばらしい。
ロ　仕事を果たすと早々に隠棲生活にもどった太公望に対して、最後まで帝につくした点がすばらしい。
ハ　帝から声をかけられればよろこんで仕えた他の三人に対し、俗世の事に関心がない点がすばらしい。
ニ　公の職務にあっても、一般人の感情を理解し、重視して、救貧事業をたくさんした点がすばらしい。
ホ　公の仕事を嫌った許由や巣父に対し、灌漑（かんがい）事業を行って、水不足から国民を救った点がすばらしい。

問二十二　本文の出典である『唐物語』は、十二世紀後半に成立したと思われる説話集である。次のイ～ホの中から説話集を一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ　栄花物語　ロ　宇津保物語　ハ　保元物語　ニ　宇治拾遺物語　ホ　雨月物語

問二十三　本文と同様の話が『史記』「留侯世家」に見られる。次は、本文中にもある、帝と四皓とが対面して会話をする部分である。これを読んで、あとの（1）（2）の問いに答えよ（返り点、送り仮名を省いた部分がある。）。

上乃大驚曰、吾求公数歲、避逃我。a 今公何自従吾兒游乎。四人皆曰、陛下軽士善罵。臣等義不受辱。故恐而亡匿。竊聞、太子為人、仁孝恭敬愛士、天下 b 不延頸欲為太子死者。故臣等来耳。

（注）游…「遊」に同じ。ここでは仕えること。

（1）傍線部aに返り点を施す場合、最も適切なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ　今公何自従吾兒游乎
ロ　今公何自従吾兒游乎
ハ　今公何自従吾兒游乎
ニ　今公何自従吾兒游乎
ホ　今公何自従吾兒游乎

（2）空欄 b に入る語として最も適切なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ　有　ロ　莫　ハ　憎　ニ　誉　ホ　聞

〔以下余白〕